

(Ⅳ-98) 近代の足利市における金融機関の創設とその影響に関する一考察

足利工業大学工学部土木工学科 学生会員 船渡川 崇
 足利工業大学工学部土木工学科 正 会 員 福島 二郎
 足利工業大学工学部土木工学科 学生会員 高 久 徹

1. はじめに

わが国における近代的金融機関としての銀行の創設は、明治政府による近代化政策推進の中で行われた。この新しい金融制度の導入は、政府によって推し進められた殖産興業政策の達成のためには必要不可欠であり、首都東京に銀行が創設されるとともに、地方にも波及していった。このようにして各地に創設された銀行は、当該地方の産業の進展等、その近代化に少なからず影響を及ぼしたものと考えられる。そこで本研究では、足利市を事例として、銀行の創設とその展開過程を検証するとともに、銀行創設に伴う地域への影響について分析することを目的とする。

2. 我が国における金融機関の創設に関する法制度の整備過程

明治2年、新しい金融制度の導入とその整備を主管する機関として大蔵省が明治政府により設置された。明治5年に「国立銀行条例」が公布され、さらに明治9年には同条例の規制が大幅に緩和されたことにより、各地に国立銀行が創設されるとともに、普通銀行の創設も可能になった。その後、明治15年には「日本銀行条例」が公布され、さらに明治17年の「兌換銀行券条例」の公布により、日本銀行は銀行券発券の独占権が与えられた。これに伴い各地に設立された国立銀行は普通銀行へと移行し、この普通銀行は産業金融の補完機関・救済機関として位置付けられた。また、この普通銀行を保護・育成することを目的として「銀行条例」が明治23年に公布され、これにより普通銀行が各地に設立されていくことになる。

3. 足利市における金融機関の創設とその展開

表-1に、近代の足利市における銀行の設立状況を示す。明治9年の「国立銀行条例」の改正により、紙幣増発と相俟って経済界は活況を呈し、また足利織物業も好況を示した。そうした状況の中、足利地域においても銀行設置の気運が高まり、機業関係者らを中心に資金運用の拡大を目的として、明治11年に第四十一国立銀行足利支店が創設された。その後、足利織物に対する需要は年々高まり、業界の資金需要は急速に増大した。そのため、第四十国立銀行の足利支店の誘致、さらには、足利地域に本店を置く新規銀行の創設が隣町の桐生を巻き込み模索され、明治28年、織物業者の総意・主導により足利銀行が設立された。また、明治30年には三井銀行足利支店も織物業者らにより誘致された。

表-1 近代の足利地域に設立された銀行とその沿革

銀行名	開業年月日	住所	開業当時の頭取・支配人	開業当時の資本金(万円)	沿革(本店の設立年月日)
第四十一国立銀行足利支店	明.11.10.1	四丁目	木村半兵衛 小泉兵八郎	20	本店、栃木町。M31.株式会社第四十一銀行に改組。株式会社第四十銀行と合併し八十一銀行新設。(明.10.10)
第四十国立銀行足利支店	明.21.4	二丁目	南条新六郎 笠原 円蔵	28	本店、館林町。M32.株式会社第四十銀行に改組。本店を桐生に移転。八十一銀行となりT10.7東海銀行と合併S46.10第一勧業銀行と合併現在に至る。(明.11.1)
株式会社足利銀行	明.28.10.1	通三丁目	荻野萬太郎 相馬圭左衛門	15	本店、足利町。S.42.2.13本店を足利から宇都宮に移転。(明.28.8.1)
合名会社三井銀行足利支店	明.30.1	二丁目	三井高保	200	本店、東京。M.34年の恐慌に引き続く不況により、M36.9.30足利から撤退。現在のさくら銀行。(明.26.6.21)
株式会社安田銀行足利支店	大.12.11	通二丁目	二代安田善次郎 結城豊太郎	15,000	明治商業銀行を吸収し設立。本店、東京。S.23.10.1商号を富士銀行と改称。(大.12.11)

(「足利織物史上・下巻」・「三井銀行八十年史」・「富士銀行の百年」を基に作成)

4. 銀行創設に伴う地域への影響分析

(1) 織物業への影響

図-1に、足利銀行の割引手形発行額(当時における銀行の織物業者への貸付額)と織物生産高を示す。明

キーワード：近代、足利市、金融機関の創設、影響分析

連絡先：足利工業大学工学部土木工学科、栃木県足利市大前町 268-1、TEL.0284(62)0605

治 28 年の開業以降、織物業への貸付がはじまり、それに伴って織物生産高も伸展するとともに、さらに、明治末期からの貸付の増大と相俟って大正期以降の織物生産高の急激な伸長が符合している。この状況は、銀行

の設置を主導した業界の意図したところであったと考えられる。

(2) 都市基盤形成への影響

足利地域に初めて電気を供給した渡良瀬水力電気株式会社は、資本金 20 万円として明治 41 年 2 月に開業した。また足利瓦斯株式会社は、資本金 25 万円により明治 44 年 7 月に設立され、同年 12 月より足利地域に瓦斯供給が開始された。

両会社とも、その設立の目的は、「市民生活の改善」と「産業開発」である。両会社の設立当時の株主構成では、渡良瀬水電では電気の恩恵を直接受ける地域住民のみの 32 名であり、

一方足利瓦斯会社は、147 名の内、直接その恩恵に浴する足利地域が 102 人 (70%)、その他の地域が 45 人 (30%) となっている。

次に、表-2 に渡良瀬水力電気株式会社、表-3 に足利瓦斯会社の創設時における役員等を示す。両会社とも、地域の機業家とともに、その機業の伸展を支えた銀行幹部・関係者が多数を占め、両会社創設を主導または支援したことが窺える。

また、図-2 は足利瓦斯株式会社設立以降における瓦斯の供給量の推移を示している。会社設立当初は、燈火用・熱用および瓦斯機（産業の原動力用）とも順調な伸びを示し、瓦斯による環境改善は市民生活および産業ともその影響が窺える。しかしながら、

その後は、熱用は漸時進展しているのに対して、燈火および瓦斯機用は大きく減少していく傾向になる。この間、織物会社との間に契約された動力源としての供給が、電気会社との関わりの中で反故になる等、トラブルも発生している。

このように、両会社の設立は地域の進展に大きな影響を及ぼしたが、その後の展開は電力会社の営業状況も踏まえ、さらに検討が必要である。

5. まとめ

本研究により、以下のことが明らかになった。

(1) 近代の足利市における銀行創設は、地場産業の進展だけに止まらず、都市基盤整備をも促した。すなわち、織物産業の進展という第一義的な目的の達成が、さらなる進展としての機械工業化を要請し、ガスおよび電力の導入へと結びついた。

(2) 足利瓦斯株式会社は現在も存続し、一方、渡良瀬水力電気会社はその後利根発電に合併され、さらにその利根発電は、前述のとおり機業の原動力供給において有利な展開になったにもかかわらず現存していない。その背景については、両会社の株主の多寡および株主の地域構成等も踏まえ、さらに検討が必要である。

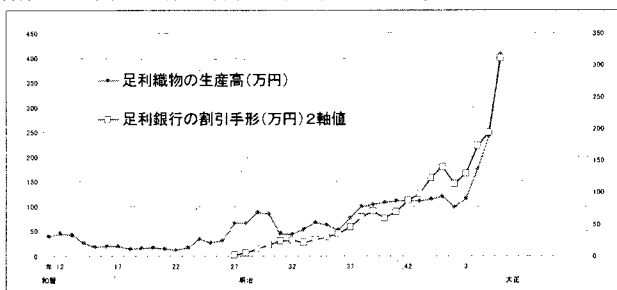


図-1 足利銀行の割引手形と足利織物生産高の変遷

(「桐生の今昔」・「渡良瀬水力電気株式会社定款」を基に作成)

表-2 渡良瀬水力電気会社役員

役職	名前	職業(住所)
社長	森宗作	株式会社四十銀行頭取・糸商・地主(桐生)
取締役	倉上文左衛門	買継商(桐生)
	大沢福太郎	議員(桐生)
	倉坂秀典	織物製造業(桐生)
	岩下善七郎	買継商(足利)
	萩野篤太郎	足利銀行頭取(足利)
監査役	中島宇三郎	大間々銀行取締役頭取(大間々)
	北川恭平	織物製造業(桐生)
	飯塚春太郎	織物製造業(桐生)
	木村達七	織物製造業(足利)

(「桐生の今昔」・「渡良瀬水力電気株式会社定款」を基に作成)

表-3 足利瓦斯会社の役員と発起人

役職	名前	職業
社長	石川 宗吉	織物業・商會議員
取締役	大嶋 芳三郎	織物製造業・足利銀行取締役
	黒田 卯平	織物製造業・東町郵便局長
	安川 隆治	地主
	阿由美 博作	織物製造業
	初山 唯四郎	織物製造業・房舎議員
支配人	長 裕之	後の町長
	坂野 清太郎	足利銀行頭取
	澤村 太吉	金料貸附・銀行家
監査役	須永 平太郎	織物製造業・四十一銀行支配人
	松岡 栄太郎	
主任技師	岩下善七郎	織物製造業・足利銀行取締役
	川崎平五郎	町会議員・足利農會会長
役員以外の発起人	廣橋与左衛門	商人(足袋)
	松岡 八郎	織物製造業
	松岡 三郎	織物製造業
	原田金三郎	糸商(絹糸)
	原田市郎右衛門	染料商・足利銀行取締役
	津久井平右衛門	
	安田源蔵	買継商

(「五十年の歩み」・「足利市史」を基に作成)

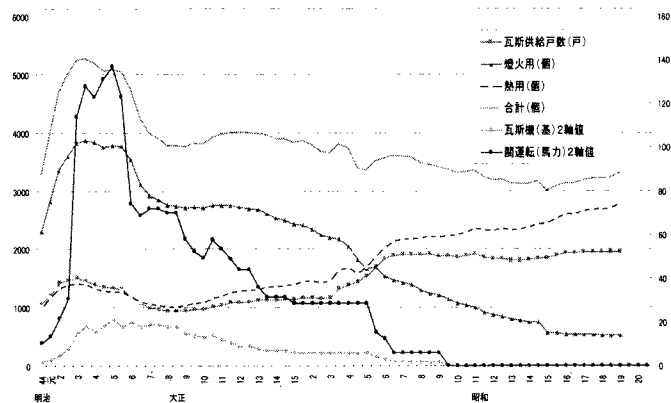


図-2 近代足利市における瓦斯供給の変遷

(「足利瓦斯株式会社創業報告書第壹回～六拾七回」を基に作成)